

行興用四座樂文  
 璃瑠淨开三人



座樂文 橋ッ四

るかに顔いる明く若  
 粉白トーレ



店商平養尾平





# 文樂座人形浄瑠璃

繚亂の春に咲く郷土藝術の華



前 繪本太功記  
 本館寺の段 三時開幕の豫定  
 御休憩時間 十五分間の豫定  
 尼ヶ崎の段 四時開幕の豫定  
 御休憩時間 二十分間の豫定  
 義経千本櫻  
 壽しやの段 六時開幕の豫定  
 御休憩時間 二十分間の豫定  
 道行初音の旅籠の段 七時五十分開幕の豫定  
 御休憩時間 二十分間の豫定  
 艶容女舞衣  
 酒麩の段 八時五十分開幕の豫定  
 御休憩時間 十五分間の豫定  
 増補大江山  
 辰り鑪の段 十時五分開幕の豫定  
 打出十時四十五分の豫定  
 (舞臺監督 松田種次)



# 文樂座由來

## 人形淨瑠璃緣起

當文樂座は百餘年の昔淡路の人権村文樂軒が大阪高津區に櫓を起したのに始まり、一時中絶しましたのを十七年終に東區淡路町五丁目御靈神社境内へ移つたのであります以來發展を來たしてゐましたが大正十五年晚秋不慮の災禍に喪失し其後本城を物色中このほご四ツ橋に新築いたしました、而も

日本にこれ一座きり云ふのは心細い次第で、彼の能樂も同様日本古来の舞臺藝術として、之を永遠に保存すべき、怖らくは國民的義務があらうか考へます次第で御座ります。序でなむら此人形は大體、首、胴、手及び足の四部に分ける事が出来、而も其首あるひは頭につきましては勿論大まかではあるが大體の役々も定まつて居ります。例へばげんびし(檢非違使)と云ふのは、竹本座の『用名座天皇職人鑑』の時檢非違使の役に使つたから此名が出たので其後は廣く世評時代共に用ひられて、例へば『寺子屋』の源藏、『妻八』の八郎兵衛、或は『千本櫻』の銀平、『陣屋の盛綱』のこきき、なほ之の眠り目なるはあの盲兵助などに使ひます。今では實盛なども之です、然し南

水漫遊などを見るに別に成つて居るやうであります。それから矢張南水漫遊には素盞鳴こありますのむ今の所謂孔明と呼ぶ頭で由良之助などにも使ふ事がある云ひます兎もあれ昔相丞や『薄雪』の兵衛、あるひは『紙治』の孫右衛門などを勤める首で、矢張竹本座へ近松も書いた『日本振袖始』から出た人形だも申します。それから若男こいふのは源太も呼んでゐるさか聞きますか持役としては『朝顔日記』の胸澤に『太十』の重次郎、その眼隔へ張を入れ其肩を引きつめるこ『阿古屋』の重忠に成つたりし他種類の若男は致盛の役などをするこ云ひます。又所謂おやまの中にはおむすこ云つて之は勿論娘の事で『野崎』のお染『壺坂』のお里妹脊山』のお三論などを勤める

のもあります、南水漫遊に傾城もあるのも多分之と同じものか考へます。斯んな具合で今云ふ南水漫遊には凡そ廿六種の人形品目も擧げられて居るのであります。今から見れば簡單なものに相違なかつたけれど、後世人形と呼ぶ種類の物は、日本でも遠い昔からあつたのであります。其れは傀儡子に始まつたもので、傀儡子の名は已に十餘年前に『和名抄』や『新猿樂記』『雲州往來』に見えて居り、傀儡子の輪廓は、王朝末期の文章博士大江匡房の『傀儡子記』に傳はつて居つて、傀儡子は遊牧の民で、男は狩を表業に、木、偶、や土の偶を舞はせたさ御座います。其當時に、四三云ふのが傀儡を舞はせた事む『散木奇歌集』に見えて居ります。手遣ひの幼稚

有る向流の佛の  
よれかね  
わつて  
まをさばやせほ  
わたりかね



電話  
二八三番

録登 標商 銘茶商

半笠 龍 誌 舖 大 橋 池 卸 阪 大

電話新町三三番

な物には相違なかつたでせうも、多少の糸が附いて居たかも知れない、云ふ想像は出来ない事もありません。其後傀儡子は、門附か辻立で命脈を維いて居たらしく御座います、浄土宗の起るに至つて、傀儡子の大方は浄土宗の行者になり、特技の人形を舞はして勸化の効を顯はしたものでらしく、所謂首掛け芝居の形式ではあつたが、佛菩薩の本縁や、寺社の縁起、即ち謂ふ所の本地物を語る説經と結んで、人形舞はしは自然と諸國に擴がる様になりました。これは人形舞はしの擡頭する遠因だつたと思はれます。而して、其内には例の三味線が渡來して来るし又お粗末ながら淨瑠璃さいふものも出來た、即ち京都の目貫屋と云へるが西の宮から人形舞しを誘ひ出して、茲

に始めて三味線に上した淨瑠璃、又それに合せて舞す人形と此三者が綜合される事に成りましたのも、慶長年中、即ち徳川の始頃ですが、忽ちにして京では四條五條の如き或は江戸の堺町さか葺屋町さか、櫓が立つて此人形芝居が繁昌したのであります。順序として當然此頃には最う人形の類も増してはゐたのですも、然し舞臺などは固より無く其人形さて首もあるばかり、遣ひ手の手が人形の着物の襦から袖口へ出されて舞されたもので、大阪の石井飛彈櫓が始めて其手足の工夫もしたものですか。由來此様なるものは人形師の所有なりしを後に淨瑠璃太夫の勢強くこれを専らにするに至つたこの事。さて竹田のからくり人形も出來たり、野呂松ののるま人形も出

來たり、次郎三郎がおやま、人形を使つたり、殊には彼の元祿時代になるさ大阪(義太夫)が現はれて竹本座をはじめ、又近松翁が現はれて此義太夫節のために人形芝居に最も適切な名淨瑠璃を澤山書き卸し、しかも其人形遣ひとしては辰松八郎兵衛と云ふ名人が出て、今の出遣ひの如きも此人によつて始まつた云ふのが、始めは此人形を下の幕さ上の顔隠し幕の間から出して遣つてゐたので、畢竟人形の動くに従つて自然遣ひ手の身体も動く之が見好くないから黒幕の陰に黒頭巾して遣つてゐたものを、愈々今度八郎兵衛も、袴を着て手摺を離れ無量の手妻を遣ふに其全身少しも亂るゝ事かないといふ評判を取つたのであります。加之他方また豊竹座の出來るあり、即ち西

と東と同じ大阪の地に於て太夫三味線、作者から人形遣ひと全く競争的に繁昌を來したのですから、従つて其進歩發達は眼覚しいものがあり、道具建から人形衣裳總ては美々しく立派やかを盡し、舞臺大幕の上の小幕を引くやら山簾を本山の張ぬきにするやら、太夫も出語りをするやら、例へば人形にしてから先づ眼も動き、指先も動き、享保の末には竹本座「大内鑑」の與勘平彌勘平が腹をふくらまし、元文になるさ豊竹座「武烈天皇巖」の佐手彦の眉を動かしてはじめるなど、非常に發達を遂げたのであります。即ち言を換れば當時名人の遣ひ手が輩出した次第で、中にも吉田文三郎の如きは享保始め竹本座の「國性爺後日合戦」に初出勤、錦舎の出遣ひに片手の晴業を

品用券奉  
機爲勝轉輪  
刷印諸  
版爲勝轉輪  
大阪南區道頓堀  
電話南區六九二番

各種扇問屋  
戸田商店  
大阪市南區道頓堀  
下大和橋  
電話南六九二番



人形

小田 春永 桐竹門造  
 阿能の局 吉田扇太郎  
 森 蘭丸 吉田光之助  
 腰元しのぶ 吉田文之助  
 三法師 吉田玉吉  
 森 力丸 吉田文作  
 宗 祇坊 吉田市松  
 軍 兵 大 ぜ い

を寢して一夜の宿を懸て乞ひ家の様子を探りに来た木下藤吉を光秀は刺すつもりで母皇月を刺殺してしまふさいふのがこの段の内容であります

本能寺の段

鹿の音轟の音もかれ／＼契り、あらよしなや、形見の扇より、形見の扇より、猶裏表ある物は、人心なりけるぞや、あふぎさば空言や、逢はでぞ戀ほそふ物を。詞局一曲出来た。伴春忠も名代孫殿へ御馳走に、何と面白いが。サ、注げくこ大盃。はつこ心得しのぶが酌。蘭丸へさす所なれども、阿野の局も舞の一手、疲れを謝する其爲に局へ盃さし申す。是れば／＼不束な一奏、御意に叶ふて其上も無き

身の眞加こ、言ひつゝ局は御盃、少し引き受けさし置けば、春永公笑聲に入り。詞ナニ蘭丸、局も間を仕れど、重き御説も諷ひなく。詞コハ仰せに候へども、一滴も及ばぬ某、此義は偏に御高免を。ハテ扱吞まぬ所を吞ます興、看ば汝が望み次第すりやお着を下されふこな。こゝ六十餘州を手に握る此春永、サ、何なりとも望め。ハア、然らば何卒此蘭丸に、軍勢を四五千ばかり下し給はらば、有難からんこ相述べればム、心得ぬ汝も望、若し軍勢を與へなば。さん候、丹州龜山へ押寄せ、唯一戦に光秀が首討取つて、君の災ひを避け申さん。成程尤なる願なれども、入らざる心配無用。左やうな事に骨折らすと、早々一盞傾け

尼ヶ崎の段

豊鶴竹 和泉太夫  
 澤本相生太夫  
 竹澤芳之助  
 澤島浅太夫  
 豊竹つばめ太夫  
 野澤勝市  
 切 鶴豊 澤古叙太夫

人形

母 さつき 吉田玉七  
 妻 みさほ 吉田文五郎  
 嫁 初菊 桐竹紋十郎  
 眞柴久吉 桐竹政龜  
 武智重次郎 吉田玉松  
 武智光秀 吉田榮三  
 加藤正清 吉田文之助  
 軍 兵 大 ぜ い

て暑さをしのぐが身の養生、飛立つばかり有明の、夜盡さなき樂の、榮花にも榮耀にも、此春永には及ばぬ。我君の御説には候へども、安士の無念を散せんご、一度は無叛の旗を上げ窮鼠返つて御身の大事。ア、流石は若氣、北國には柴田勝家西國には眞柴久吉、龍に翼の小田春永。君の御説は去る事ながら、蘭丸殿の言葉の如く、油斷大敵。ハテサテ局までも同じ様に、入らざる此場の長詮議、御客人が囁ふら／＼ねぶり、身もほつと退屈。イテ一睡の夢の間の、契はいざと戯れて座を立ち給へば阿野の局、若君いざなひ静々こ、帳臺深く入り給ふ。後にうつこり蘭丸が、心一つにこつ措いつ。思ひば同じ女氣の、人目しのぶが寄添

ひて。詞申し蘭丸様、もう何時でござりませうなア。是はしのぶ殿、そもじはまだ奥へ行かすか。アイ。ハテ扱それは不埒千萬。御用もあらん早奥へこ、言ふ顔じつこ打眺め。詞ほんにまあ女の心さ男さは、それ程まで違ふ物か。兄齋藤藏之助殿にお頼み申して、春永様の奥勤も、あなたのお傍に居たいばつかり。今更いふも恥しなから、去年の初春洛東の、地主のお庭の花盛り、腰元に誘はれ、願ひかけまく初戀の、色も香もある殿御ぶり、観音様のお仲立、互の胸の下帯、解けて嬉しい新枕、かばるまいぞのお言葉が、直に心の誓紙ぞと、片時忘れぬ女房が、お傍に居るがお嫌なら、いつそ手にかへ給はれど、びんごすれ木の糸櫻、花も亂る



「風情なり。さしもに猛き蘭丸も、心の外の曲者に取りひしむれて脊撫でさすり、詞イヤもう何事なう申せしも、お氣に觸らば眞平々々。百萬の強敵にも、びくごもせぬ某が、斯くの通りご手を突けば。詞エ、又人を衛ながらすのかいなア。春水様も大方に、斑女が國のお睦言、お局様の取掛で、出船の相伴。サアござんせご手を取れば。詞ハテ扱替みや。人目を忍ぶ二人の中、殊に今宵は君の直宿、又の首尾をさ振切るを、無理に引立て奥の間へ、入るやいるさの月影に、しのぶの亂れ亂れ合ふ、わりなき夢や結ぶらん。早更け渡る夏の夜の、そよ吹く風も物凄く、寝られぬまゝに御大将、手づから障子押開き、何心なく茂みの方、見遣り

給へばさばらん、驚き騒ぐ塙の鳥。詞ハテいぶかしや。未だ明けやらぬ夏の夜に、庭木を離れ騒ぐ群鳥、合點行かじごきつご目を付け、怪しみ給ふ時しもあれ、遠音に響く鐘太鼓。春水つ、立ち耳をそば立て。詞アレア、レ次第に近付く人馬の物音、直宿の者はあらざるか、急ぎ物見を仕れさ仰せの下より阿野の局、長刀かい込み走り出で。詞君の大事に候ぞや。蘭丸殿はいづくに有る。早く物見を致されよ。妾も俱にご表の方、呼ばり、飛んで出づれば、春水聲かけ。ヤア、蘭丸。詞叛逆有りご覺えた。急ぎ物見を仕れよ、上意にはつご蘭丸は、振返り見る廊下の高欄、これ幸ひの物見ぞと、言ふより早く

駈上り、四方をきつご打見やり。詞物の女色はわかれご、此本能寺を志、押寄するは、察する所、武智光秀。スリヤ光秀が反逆ごな、今こそ後悔汝が諫、聞入れざるも傾く運命、只此上は防ぎの用意。ハア委細承知仕る、が假令一致に防ごとも、院内僅か三百餘人、思へば、主君ご俱に。蘭丸、我君様。チエ、口惜しやご、主従が、怒りの齒がみ、逆立髪、無念涙の折からに、表の方より森の力丸、廣庭に大息つき、詞御油斷あるな兄者人、武智光秀我君に多年の恨みを散せんご、手勢すぐつて四千餘騎、左馬五郎を初めごし、或は齋藤藏之助、築地間近く押寄せ候ご、言ふ間も非らず蘭丸は其儘ひらりご飛下りて。我君には恐れ

ながら防ぎ矢の御用意有つて然るべし。イデ、某が彼方に向ひ、一當あて、眼りを覺さん。力丸來れご兄弟は、飛ぶが如くに斬けり行く。後打見やり春水公、此上は防ぎの一矢、先づさし當つて一大事は三法師。詞ヤア、宗祇、若を誘ひ早く。御説の下にかひなく、しのぶ諸共、茶道の宗祇、若君抱き參らせて、足もわな、胸震ひ。しのぶも俱にうろつく所へ、多勢を切り抜け阿野の局、其身は數ヶ所の痛手ながら、血に染む長刀かい込んで。心も強に立戻り。詞申し、我君様、最早敵は込いつて候へば、君に代つて一單御身を遁れ下さるべしご、口には言へご御名残、涙瀾増すばかりなり。詞ヤア愚々。生中身を遁れんご、返つ

て名も無き奴原に、首を渡さば死後の恥辱、汝は我になり代り、宗祇引連れ三法師を、何卒守護し落延びて、此旗諸共、久吉が手に渡し、我存念を暗せよ。猶豫は返つて不忠の至りご、仰せにわつご泣崩れ。假令不忠になるごとも、君の御最期他所になし、何ご此儘落られふ、此義はお赦し下さりませ、これを思へば、自が宵の酒宴の其時に、斑女が國のかこち言、其さしの扇さば、別れを告げし報せかご、思ひ廻せば、いご猶、悲しいわいのごごご伏し、歎き沈めばお道理ご、心を汲んで諸袖を、しぼるしのぶが俱涙、泣く音を添ふるばかりなり。數多の切首片手に引提げ、庭先へ立歸つたる森の蘭丸。それさ見るより春水公。詞ホ、今に

始めぬ汝の働き、シテ、様子はいかに。されば候。二條の御所へは武智光安立向ひ、當手の寄手は左馬五郎光俊、采配取つて殿しき下知。なれご味方は必死の勇者、御覽の如く首討ち取つて、一泡吹かせ候へごも、始終の勝利は。ホ、成程々々唯此上は潔く、死出三途も主従俱に、サア今聞く通り我が覺悟、早く此場を落延びぬか。但し三世の縁切らふや。サア其義はなア。ヤア縁切るも悲しくば、一時も早く落延びよ。コレサお局、君の先途を見届くるは此蘭丸、片時も急ぎ裏門より、宗祇坊何をうかり。 Chatt 合點、イヤも最前から落ちたふて、氣は上づり。コレ、しのぶ殿もお供の用意ご、言へば流石に忍び夫、言ひた



推量しやまばかりにて、初めて明かす老母の節義、きく初菊も母親も、一度にごつこ伏轉び、前後不覺に泣叫ぶ、襖押し明け何に氣無う、つか／＼出づる以前の旅僧、詞コレ／＼かみ様、風呂の湯が沸きました、ごなたぞお這入りなされませこ、云ふにこなたは、泣顔かくし。詞オ、それは御苦勞去りながら、年寄に新湯は毒、後ば若い女共、マアお先へ御出家から、いかさま、湯の辭義は水こやら、左様ならば御遠慮なく、お先へ參る、と立上れば、三人は涙押包み奥の佛間と湯殿口、入るや月もる片びさし、爰に薙取る眞柴垣、夕顔柵のこなたより、現はれ出たる武智光秀、必定久吉此内に、忍び居るこそ究竟、只一討ミ氣は張可、心は矢竹

數垣の、見越の竹をひつそぎ鎗、小田の蛙の啼音をば、こめて敵に悟られじこ、合差足拔足、窺ひより、聞ゆる物音心得たりこ、突込む手練の槍先に、わつこ魂ぎる女の泣聲、合點ゆかずこ引出す手負、眞柴にあらで眞實の、母のさつきが七轉八倒詞ヤアこは母人か、しなしたり、残念至極さばかりにて、流石の武智も仰天し、只茫然たるばかりなり、聲聞付けてかけ出る操、初菊諸共はしり出で、ノウ母様か情けない、此有様は何事と縋り歎けば目をみひらき詞歎くまい、歎くまい、内大臣春永と云ふ主君を害せし武智が一類、かくなりはつるは理の當然、系圖正しき我家を逆賊非道の名を穢す、不幸者こそ悪人こそ、たごへおたなき人

非人、不義の富貴は浮べる雪、主君を討つて功名顔、たごへ將軍になつたさて、野末の小屋の非人にも、おさりしとばしらざるか、主に背かず親に仕へ、仁美忠孝の道さへ立たばもつそう飯の切米も、百萬石に増るぞや、おのれが心只一つで、しるしは目前これを見よ、武士の命を斷つは且多にこのやうな、ひつそぎ竹の猪、突槍、主を殺した天罰の、報ひは親にも此通りこ、槍の穂先に手をかけて、ふくり苦しむ氣丈の手負妻は涙にむせ返り詞これ見給へ光秀殿、軍の首途にくれんくも、お練め申した其時に、思ひ留つて給はらばかうした歎きはあるまいに、知らぬ事さば云ひながら、現在母御を手にかけて、殺すこ云ふはエ、マ、何事

ぞいの、せめて母御の御最後に善心に立かへるこ、たつた一言聞かしてたべ、拜むわいのこ手を合はし、諫めつ泣い一つ筋に、夫を思ふ恨み泣き、操の鏡曇りなき涙に誠あらばせり。光秀聲あらわげ。詞ヤア猪小才な諫言立、無益の舌の根助すな、意根を重ぬる小田春永、勿論三代相恩の主君でなく、我諫を用ゐずして、神社佛閣を破却し、惡逆日々増長すれば、武門の習ひ天下の爲、討取たるは我器量、武王は殷の紂王を討ち、北條義時は君を流し奉る、和漢俱に無道の者を虐ぐるは、民をやすむる英傑の志、女童の知る事ならず、すさり居らうこ光秀が、一心變せぬ勇氣の顔色、取つく島もなかりけり。折しも聞ゆる陣大鼓、耳

をつらぬく金鼓の響き、あはやこ見るや表口、數ヶ所の手疵に血は瀧津瀨、刀を杖によるほひ／＼、立歸つたる武智が一子、庭さきに大息つき詞親人これにおはするや、云ふも苦しき斷末魔、見るに驚く母親より、娘は傍に走り寄り、のういたわしや十次郎様、祖母様と云ひお前迄此有様は情けない、お心たしかに持つてたべ、やいの／＼こ取付て、介抱如才泣くばかり。光秀わざと聲あらわげ。詞ヤア不覺なり十次郎、仔細は何ミ、様子はいかに、具に語れと呼はれば、はつこ心を取直し。詞親人の差圖にまかせ、手勢すぐつて三千餘騎、濱手のかたに陣所をかため、今や歸國と相待つ所に、敵はそれこそ白濱の、櫓を押切つて陸地に漕付

け詞おい／＼都へ馳せ登る、眞柴が軍勢ごさんなれこ、関をつくつて味方の軍兵、縱横無盡に雜立つれば、不意を打たれて敵は敗亡、狼狽驅ぐを追詰め爰をせんとぞ戦ふ中後の方より大音上、眞柴築前守久吉の加藤清正これにあり、逆賊武智も小童共、目に物見せてくれんすこ、いふより早く大刀抜かざし、四角八面に切立てられ、また／＼間に味方の軍卒、残らず討死仕り、無念乍も只一騎立歸つて候こ、息つきあへず物語れば、光秀怒りの髪逆立て詞ヤエ云ひ甲斐なき味方の奴原、シテ、四方天田島頭は、さん候、四方天は目さずは久吉一人こ、昨朝よりの一騎がけ、亂軍なれば生死の程も、慥にそれこ承らず、親人の御身の上、

心にかゝり候故、未練にも敵を切りぬけ、これ迄落延び歸りしぞや、此所に御座あつては危ふし、一時も早く本國へ引取り給へ、サ早く、こ深手を屈せず父親を、氣づかう孫の孝行心、聞くに老母はせき兼て、アレあれを聞きや嫁女詞其身の疵は苦にもせず、極悪人の惨めを、大事に思ふ孫が孝心、やい、光秀、子には不慙にはないか、可愛いとは思はぬかやい、おのれが心只一つで、いさし可愛の初孫を、忠と義心に健氣なる、討死でもさす事か、逆賊無道の名を汚し、殺すばなんの因果ぞと、せぐり苦しき老の身の、聲聞きつけて十次郎。詞ヤアそんなら祖母様には、御生害遊ばしたむ、今生のお暇乞今一度お顔も見たけれど、モ

ウ目が見えぬ、父上母様、初菊殿、名残り情やと手を取つて、妹背の別れ愛着の、道に引かゝるいぢらしさ母は涙に正體なく、討死するも武士の習ひさいへご情けない。詞十八年の春秋を、及の中に人となり、いつ樂しみの隙も無う、可矢の道に日をゆたけ、今日の首途の其時にも、母様今日の初陣に、天晴れ功名手柄して、父上やば、様に、響らるゝのが樂しみさ、につこ笑ふた其顔が、わしや幻にちらつて、得忘れぬとどき立て、くどき立れば初菊もほんに思へば此身ほど、はかない者が世にあらうか、解けて逢ふ夜のきぬくも、永き名残の許嫁、二世を結ぶの枕さへ、かはす間もなう此様な、悲しい別れをする事は、マゴウ

した罪か情けない、私も一所に殺してたべ、死にたいわいのと身をまたへ、互ひに手に手を取かはし名残涙のいさま乞ひ、見るに目もくれ情消え、母も老母も聲をあげ、わつこばかりに取亂せば、流石勇氣の光秀も、親の慈悲心手故の間、輪廻の絆に止めつけられ、こたへかれてはらへら雨か涙の汐境浪立ちさわぐ如くなり。又も聞ゆる人馬の物音、矢叫びの聲かまびすくM手にこる如く聞ゆれば、光秀聞よりつゝ立ち上り。詞アノ物音は敵か味方か、勝利かにこ庭さきの、搦木の松ケ枝踏しめくよち登り、眼下の村手をきつて見くだし。詞和田の岬の弓手より、追々つやく數多の兵船、間近く立つたる魚鱗の備へ、千生瓢の馬印は、

疑ひもなき眞柴久吉、風を喰つて此家を逃げのび、手勢引具し光秀を討取るでだてと覺えたり。と云ふより早くひらりと飛下り、草履掴みの猿面冠者、イテ一トひしき身繕ひの勢ひ込んでかか出せば。詞ヤア武智光秀暫く待て、眞柴築前守久吉、對面せんと呼はつて、三衣にかける陣羽織、小手脚當も優美の骨柄、悠然として立出れば、光秀見るより仰天し、駭戻つてはつたと睨み。詞ヤ、珍らし、眞柴久吉、武智十兵衛光秀が此世の引導渡してくれん、觀念せよと詰寄る光秀、中を隔つる老鳥の子故に手疵屈せぬ老女、ノウ久吉様詞我子に代るこの母も、天命のがれぬ引をせ槍、つくりし罪の萬分一、亡る事もあらうか、思ひ餘つた此最後、武智が母は逆襲付に、懸つて無慘の死を遂げしと、末世の記録に

残してたべ、それも矢張悴めが、可愛さ故の罪亡し。詞うるさの婆婆に残らんより、孫と一語に死出三途、ハア私もお供いたしまする、いづれもさらば、おさらばらと、未練残さぬ武士の花も質もある此世の別れ、今ぞばかなくなりけり。操の前も初菊も更に詞も出でばこそ、あへ亡骸を押動かし、天に憧かれ地に伏して、歎く心ぞいぢらしき。哀を餘所に眞柴久吉、光秀に打向ひ。詞俱に天を戴かぬ亡君の弔ひ戦、今此所で討取つては、義あつて勇を失ふ道理、諸國の武士に久吉が軍功を知らさん爲、時日移さず山崎にて、勝負の雌雄を決すべし、おいかにな、流石の久吉よく云つたり。我も惟任將軍の勅許を受けし身の本懐、一トまづ都に立歸り、京洛中の者共へ地子を許すも母への追善、互ひの

運は天王山、洞崎に陣所を構へ、只一戦にかけ崩さん、首を洗つて觀念せよ、ホー、ホー、何さ、たごへ項羽が勇ありとも、我又孫吳が秘術をふるひ、千變萬化にかけなやまし、勝鬨上るは瞬く中久吉が詞はゆるがぬ大磐石、忽ち廻り小栗柄の、土に哀を殘すは、知らず知られぬ敵味方、睨み別る二人の勇者、二世をかためたの別れの涙、かかれさてもうば王の、其黒髪をあへなくも、切拂ふたる尼ヶ崎、菩提の種さ夕顔の、軒にきらめく千生瓢、駒のいな、き迎ひの軍卒、見渡す沖は中國より、追々入来る數萬の兵船、威風凜々凜然たる、眞柴が武名假名書に、寫す繪本の太功記、末世の世までも三重M残しける。



義經千本櫻

鮎屋の段  
道行初音の旅路の段

壽しやの段

切 竹本津太夫  
鶴澤友次郎

人形

彌左衛門女房 吉田千七  
娘 お里 吉田文五郎  
下男 彌助 吉田扇太郎  
いかみの權太 吉田榮三  
親 彌左衛門 桐竹政龜  
若葉内侍 桐竹紋太郎  
六代君 桐竹紋司

淨瑠璃といへば千本櫻と謂はれる位世界的に知られてゐる名作で竹田出雲、三好松洛、並木千柳の三者合作の尤で全五段もの。

延享四年十一月の竹本座に書下されて以來連續と打つけられた夢幻劇でこの鮎屋の段は恰度その三段目の切になつてゐます、初演は竹本此大夫、鶴澤友治郎で語つてゐます、こたびは紋下竹本津大夫が定評ある咽喉を聴かせます。

初演に吉田文三郎が創案してつたものでそのまゝを今に傳へてゐる繪畫美でありませぬ。

内容を記して見ますと、義經と靜御前の情話に平家の落人を骨子としたもので、義經の堀川御所へ川越太郎が兄頼朝の上使として三ヶ條の詰問がある、第一は鎌倉へ送つた平家の大将知盛、維盛、教盛の首級が何れも偽物なること、第二は鎌倉を亡ぼす院宣と共に初音の鼓を賜はりそれに頼朝を呪ふ聲ある事、第三は平時忠の息女卿の君を寵愛する事これ義經謀反の下心といふ。之に對して義經は立派に言ひ開き且、卿の君も自害して義經の疑は晴れたが鎌倉方の軍勢と武藏坊辨慶は衝突して遂に兄弟不和となり義經主従は都を落ちま

梶原平三景時 吉田玉市  
女房小仙 吉田覺三郎  
粹 善太 吉田玉昇  
取 卷 大 ぜ い

道行初音の旅路の段

靜御前 竹本鏡太夫  
忠 信 竹本大隅太夫

竹本越名太夫  
竹本源路太夫  
竹本富太夫  
竹本駒尾太夫  
竹本隅榮太夫  
竹本照榮太夫  
竹本小松太夫  
竹本駒司太夫  
竹本駒太夫  
竹本津磨太夫

す、それからがこの段の内容になります。平家の落人維盛は下市の釣瓶鮎彌左衛門の家に下郎彌助と名乗つてかくまはれてゐる。すしやの粹はいかみの權太といつて名うつてのならず者である。下市の権の木茶屋で維盛の妻子若葉内侍と六代君に家來の主馬小金吾をお尋ね者に見て言ひかゝりをつげ甘金を強請ります、これ権の木の段であります。權太は母親に無心してはねつけられるので訴人して褒美の金にありつかんと代官所へと駈け出しますあこへ若葉の内侍と六代君が鮎屋へ尋ねて來て維盛と久しい間の對面をします。鮎屋の娘お里は彌助に深く想をかけてゐたも自分の戀を捨て、内侍親子を下市へ落してやります。訴人によつて

梶原は首受取りに來ます、彌左衛門は豫て主馬小金吾が追手と戦つて自害した首を身代りに立てる、權太も吹心して我妻子を内侍、六代君の身代りに立てます。あこで梶原が置いてあつた品を改めます、輪袈裟が出ますがこれは頼朝が維盛に出家得度せよとの美しい心情も見えて維盛は高野へ發足します。

院本を御紹介いたしますと……  
M 立歸る歌三下り春は來れども花咲かす、娘も漬けた鮎なれば、馴れがよかるこ買ひに來る。風味も吉野下市に、賣弘めたる所の名物。釣瓶鮎屋の彌左衛門、留守の内にも商賣に、抜目も内儀も早漬けに、娘お里も肩帯、裾に前垂ほやく、愛に愛持つ鮎の鮎、押へてしめてなれさ

竹本 文字榮太夫  
竹本 佐久太夫  
竹本 宮太夫  
竹本 相壽太夫  
竹本 おぼこ太夫  
竹本 隅壽太夫  
豊澤 新左衛門  
鶴澤 道八  
豊澤 猿糸  
竹澤 團六  
鶴澤 友之助  
鶴澤 友叶  
豊澤 猿太若  
野澤 喜代之助  
豊澤 新三郎

する、味い盛りの振袖が、釣瓶鮎こは物らし、縮木に栓を打ち込んで桶片付けて申し母様、昨日も様の云はしやるには、翌の晩には内の彌助と祝言さす程に、世間暗れて女夫になれとお仰有たが、日おくれてもお歸りないは嘘かいな。オ、あの云やることはいの、何の嘘であらうぞ器量のよいを見込みに、熊野参りから連れて戻つて、氣も心も知る彌助と言ふ我名を譲り、主は彌左衛門と改めて、内の事任せて置しやるはそなたと娶す豫ての心、今日は俄に役所から、親父殿を呼びに来て、思はぬひま入り、迎ひにやるにも人は無し。サイナア折悪う彌助殿も方々から鮎の談、仕込みの桶がたるまいと、明桶ごりにいかれました、もう

戻らるゝでござんしよと、嚙半へ明桶荷ひ、戻る男の取なりも、利口で伊達で、色も香も、知る人ぞ知る優男、娘も好いた厚髪に、冠着せても憎からず、内へ入る間も待兼ねてお里は嬉しく、アレ彌助様の戻らんした、詞まち兼ねた遅かつた、もしやごこそへ寄つてかき、氣が廻つた案じたこと、女房顔していふて見る、流石鮎屋の娘まで、早い馴さぞ見えにける。母はにこ／＼笑ひを呑み、詞彌助殿氣にかけて下さんな、此の吉野口の辨財天の教へによつて、夫を神さも佛さも、頂いて居よさある天女の掟、そのかばり程愷氣も深い、又ありやうは親の孫、瓜のつるにてはござらぬと云ひくろむれば詞これはまアかへつて迷惑、段々お世話の

豊澤 新吉  
野澤 勝三郎  
豊澤 團伊三  
野澤 市之助  
豊澤 廣二  
鶴澤 道次郎

静御前 吉田文五郎  
狐忠信 吉田榮三

人形

上、大切なお娘御迄下され、お禮の申様もござりませぬ。去りながら兎角お前には彌助殿／＼と殿付をなされて、さりさては氣の毒、やつぱり彌助どうせい、かうせいとお心安うナ申し。イヤ／＼それば赦して下さい。そりやなぞでござります。さればいの、彌助と云う名はこれまで連合の呼名、殿付せずにごうせい、かうせいとは、勿體なうて云ひ憎い、言ひ馴れた通り殿付さして下されと實に夫をば大切に、思ふ掟を幸ひに娘へ之を聞けがしの、母の慈悲さぞ聞えける。お里彌助は明桶を、板間に並べて居る所へ、此家の惣領いのみ権大、門口より乙聲で、詞母者人／＼と、云ひつゝ入ればお里は憐り、又兄様もようお出さもみ手する

詞さま／＼／＼しい其面なんぢや、よう来たが悔りか、わりや彌助さ味ひ事して居るさうなむ、コリヤ彌助もよう聞け、今追ひ出されて居ても籠の下の灰までおれがもの、今日は親父の毛虫が役所へいたご聞いたによつて、ちま母者人に云う事あつて来た。二人ながら奥へうせうと、覗み廻はされうぢ／＼と、これにさいふて立つ彌助、娘も後に引添ふて一問へこそば入にけれ。跡に母親溜息つき、詞コリヤ又留守を考へ無心に来たか、性懲もないわんげく者、其おのれが心から嫁子があつても足踏一つさす事ならぬ、聞きや此村へ来てゐるげなむ、互に知らねばすれ合ふても、嫁姑のあきめくら、眼つぶれさ人々に、云はれるが面白ない、

へエ、不孝者めと目に角を、立かばつたる機嫌にぐんにやり、直ぐではいかぬといがみの權、思案しかへて詞申し母者人今晚參つたは、無心でばござりませぬ、お暇乞に參りました。ソリヤ何んで。私は遠い所へ參ります程に、親父様もお前にも、随分おめで、と、こ、しほれかければ母は驚き、詞遠い所こはそりやごこへ、ごうした譯で何にしに行くこ。

根問ひは親の欺され小口、サアしてやつたこ、目をしば叩き、詞親の物は子の物と、お前へこそ無心申せ、ついに人の物箸片し、いがんだ事もいたしませぬに、不幸の罰か夜前私は、大盗人にあひました。サア其中に代官所へ上る、年貢銀三貫目と言ふ物盗に取られ、言譯なく、仕様も

なく、お仕置にあふよりはと、覺悟極めてをりまする。情ない目に合ひましたと、廣口袖をば顔にあてしやくり上げても出ぬ涙、鼻が邪覺して目の縁へ、こゝかぬ舌を恨めしき。甘い中にもわけて母親、實と思ひこもに目をすり、詞鬼神に横道なしと年貢の銀を盗まれ死なうと覺悟はまた出かした、災難に合ふも親の罰、よう思ひ知れよ。アイ、思ひ知つてはおりますけれど、何うで死なればなりませんまい。コリヤヤイ、あい、常のおのれが根性故、これもかたりかしられ共、しやうぶ分げにと思ふた銀、親父殿に隠してやる、これでほつさり根性直せと、そろそろ戸棚へ子の影で、親も盗みをする母の、甘い掟さへ明け兼ねる、詞つ

い鷹首でこちへ、かよござりますと仕馴れる。おのおの手業を教ふる不孝。親は我子が可愛さに、地獄の種の三貫目、後をくるめて持つて出で何ぞに包んでやりたいがと、限りないほご甘い親、うまいわろちやさいがみの權、鮭の明桶よい入物、これへ、親として、銀をつけたるこおれ鮭、蓋しめ栓しめサアよいは、これで目立ぬさげていれと、親子が工合の最中へ、若い親父彌左衛門、これも疵持足の裏、あたふたこして門口を、戻つた明けいさうち叩く、南無三親父之内には轉倒。うろたへ廻り其桶を、こへへ、こ明桶と、こもに並らべて親子はひそく、奥ま口こへ引別れ、息を詰てぞ入にける。なぜ明けぬ、こ顔にた、けば

奥より彌助、走り出て戸を明ける。内入悪しく邊を見廻し、詞コリヤ又、ごいも寝てゐるか、云つけた鮭共は、仕込んであるか、鮭桶をさげたり明けたりぐわつた、詞コリヤ思ふほど仕事が出来ぬ。女房やお里めばなにしてゐるぞ、イヤ只今奥へ呼びませうと行く彌助を引こめ、内外見廻し表をしめ、上座へ直し、手をつかへ、詞君の親御小松の内府重盛公の、御恩をうけたる某、何卒御子惟盛卿の御行衛を、思ふ折から熊野浦にて出合、御月代をすくめ此家へお供申たれ共、人目を憚かる下部の奉公、餘りこ申せば勿體なき女房ばかりに仔細を語り、今宵祝言を申すも心は娘をお宮仕へ、彌助々々々賤しき我名をお譲り申したも、

彌助くると言ふ文字の縁起、人は知らじと存せしに、今日鎌倉より梶原平三景時來つて、惟盛卿を匿ひありと、退引きせぬ詮議、烏を驚さ云ひ云けては歸れ共、邪智深い梶原、もしや吟味にまゐるも知れずと、心巧みはいたして置けとも、油斷は怪我のもこ、翌からでも我隠居上市村へお越あれと、申上れば惟盛卿、詞父重盛の厚恩を請たる者幾萬人、數限りなき其の中に、おこまか様な者あらうか、昔ばいかなる者なるぞと尋ね給へば、詞私めは平家御代盛り

本の盜賊と、御身の上を悔み給ひ、重れてなんの祟もなく、お暇を下され親里へ、立歸つて由緒ある鮭商賣今日を安樂に暮せども、梓權太郎めが盗み騙り、殺生の報ひぞと、思ひ知つたる身の懺悔、お恥しうござりますと、語るにつけて惟盛も、榮華の昔父の事、思ひ出され御膝に、落る涙ぞ勞はしき、娘お里は今宵待つ月の柱の殿もふけ、寢道具抱へて立出れば、まはばつと泣目を隠し、詞コリヤ彌助、今言ひ聞かした通り、上市村へ行く事を、必らず、忘れまいぞ、今宵はお里と爰にゆるり、か、おれさは離座敷、寝て花やると蒲團敷く。惟盛卿はつく、こ身の上又は都の空、若葉の内侍や若君の、事のみ思ひ出されて、心もすま

す氣も浮かず、打消れ給ひしを、思はせぶりこそ里は立ち寄り、詞コレイナこれな、オ、辛氣、何初心な案じてぞ、二世も三世もかための枕、詞二つ並らべてこちやれさ、先へころりも轉寢は、戀のわなこそ見えにけり。惟盛枕に寄添ひ給ひ、詞これまでこそ假の情、夫婦ならは二世の縁、結ぶにつらき一つの言譯、詞何を隠さう某は、國に残せし妻子あり貞女兩夫にまみえずの掟は、夫も同じ事、二世のかため赦してさ、流石に小松の嫡子にて、解けた様でも何處やらに親御の氣風残りける。神ならず佛なられば夫ごとも、知らぬ道を行迷ふ、若葉の内侍は若君を宿ある方に預け置き、手負の事も頼まんこ、思ひよる身も縁のはし、此

家を見かけ戸を叩き、詞一夜の宿さ乞ひ給へば、惟盛は好い退き機さ表の方、叩く扉に聲をよせ、詞此内は鮮商賣、宿屋ではござらぬさ、愛想のないも愛想さなり、詞イヤ申し稚きを連れた旅の女、是非に一夜を宣ふにぞ、斷り云うて歸さんさ、戸を押開き月影に、見れば内侍さ六代君、はつこ戸をさし内の様子、娘の手前もいぶかしく、そろ／＼立寄り見たまへば、早くも結ぶ夢の體、表内侍は不思議の思ひ、詞今のはどうやら我夫に、似たさ思へごなりかたち、つむりも青き下男、よもやと思ひ給ふ中、戸を押し開いて惟盛卿詞若葉の内侍か六代かさ、宣ふ聲にシエ、扱は我が夫、さ、様か、ノウ懐かしやと取纏り、詞はなくて三人

は、泣くより外の事ぞなかりき。先々内へご密に件ひ、詞今宵は取わけ都の事、思ひくらし居たりし、親子共に息災で不思議の對面、去りなから、某此家に居ることを、誰知らせしぞ殊にまた、逢々の旅の空供連れぬも心得ずさ、尋ね給へば若葉の君、都でお別れ申してより、須磨や八島の軍を案じ、一門残らす討死さ、聞く悲しさも嗟嘆の奥、泣いてばかり暮せしに、高野さやらんにおはするさ云ふ者ある故に、小金吾召連れお行衛を、心さす道追手に出合ひ、可愛や金吾は深手の別れ、頼みも力もない中に、廻り逢ふたは嬉しむが、三位中將惟盛様か、此お姿は何事ぞ、袖のない此羽織に、此つむりはと取付て、咽び絶入り給ふ

にぞ、面目なきに惟盛も、額に手をあて袖をあて、伏沈みてぞおはします、涙の内にも若葉の君、伏したる娘に目を付け給ひ、詞若い女中の寢入ばな、定めてあ伽の人ならん、斯くゆるかしきおくらしなら、都の事も思召し、風の便もあるべきに、打捨て給ふは胸愈々恨み給へば、詞ホ、夫ご心にかかりしかご、文の落る恐れあり、わけて此家の彌左衛門父重盛の恩報じご、我を助けてこれ迄に、重々厚き夫婦も情、何むな一禮返禮さ、思ふ折柄娘の戀路、つれなく云はば過あらん、かへつて恩が仇なりさ、假の契りは結べ共、女は嫉妬に大事も減すさ、彌左衛門にも口留して、我身の上は明さず、仇な枕も親共へ、義理にこれまで契りし

さ、語り給へば伏したる娘、こたへ兼しか聲を上げて、わつこ計りに泣出す。コハ何故と驚く内侍若君引連れ迷退んこしたまへば、詞ノウコレお待ち下されと、涙さ／＼にお里はかけより、先づ／＼これへこ内侍若君上座へ直し、詞私はお里さ申して此家の娘、いたづら者憎い奴さ、思召されん申譯、過つる春の頃、色めづらしい草中へ、繪にあるやうな殿御のお出、惟盛様さば露知らず、女の浅い心から、可愛らしい、いさしらしきこ、思ひ初めたり戀のもの、詞父も聞えず母親も、夢にもしらしてくださつたら、譬へこかれて死ねばとて、雲井に近き御方へ、鮮屋の娘も惚れられうか、一生連添ふ殿御ちやさ、思ひ込んで居るものを、二世

のかためは叶はぬ、親への義理に契つたさ、情ないお情に、あづかりましたごうご伏し、身をふるはして泣きければ、惟盛卿に氣の毒の、内侍も道理の詫び涙、かばく間もなき折からに、村の役人かけ來り、戸を叩いて、詞コレ／＼爰へ梶原様か見えませる、内掃除しておかれいさ云ひ捨て立歸へる。人々はつこ泣目も暗れ、いかばせんご俄の仰天、お里はさつそくに心付き詞先づ／＼親の隠居屋敷、上市村へさ氣をあせる、實に其事は彌左衛門、我にも教へ置きしがさ、最早開かぬ平家の運命、檢使を引受け潔く、腹かき切らんご身拵へ、内侍は悲しく、コレ此若の幼い氣盛りを思召し、一先づ爰をさ無理なりに、引立てたまへば惟



盛も、子に引かざる、後髪、是非なく其場をおち給ふ、御運のほど危ふけれ。様子を聞いたかいがみの權太、勝手口より躍り出て、詞お觸のあつた内侍六代、惟盛彌助めせしめてくれんこ、尻引からげかけ出すをコレ待つてさお里は取付き、詞兄様これは一生の私願ひ、見赦して下されさ、頼めど聞かず勿飛し、大金になる大仕事、邪覓ひろくなさ、するを蹴倒し張ごばし、最前置きし銀の鉾桶、これ忘れてはご提げて、後を慕ふお追ふて行く、詞ノウさ、様か、様さ、お里も呼ぶ聲彌左衛門母もかけ出て何事と問へは娘は、これ〳〵、詞都から惟盛様の御臺若宮尋ねさまよひお出であり、積る咄しの其中へ詮議に来るさ知らせを

聞き、三人連れて上市へ落しましたを情けない、兄様が聞いてゐて、討取るか生捕て、褒美にするさたつた今、追かけてご云ふより悔り彌左衛門、ソレ一大事さたしなみの朱鞘の脇差腰にぼつ込み、かけ出す向ふへハイ、ハイミ矢筈の提灯梶原平三景時、家來數多に十手持たせ道を塞ぐ、詞ヤア老耄め何處へ行く、逃げやうこて逃さうかご、追取まかれてはつこ吐胸。先も氣遣ひ、爰も遁れず七轉八倒心は早鐘、時に時つく如くなり、詞ヤア此奴横道者、おのれに今日惟盛が事詮議すれば存ぜぬ知らぬご云ひ抜ける。其まゝにして歸へせしは、思ひよらず踏込む爲、此家に惟盛かくまひある事、所の者より地頭へ訴へ、早速鎌倉へ早打、取

ものも取あらず來れ共、油斷の體はおのれを取逃すまい爲、サア首討つて渡すか、但し違背に及ぶか、返答せよせめつけられ、叶ぬ所ご胸をすへ、詞成程一旦はかくまひないこは申したれ共、餘り御詮議強き故、隠しても隠されず、早先達て首討たり、御覽に入れんお通りご伴ひ入れば母娘、ごうなる事ご氣遣ふ中、鉾桶提た彌左衛門、しづ〳〵出て向ふに直し、詞三位惟盛の首、御受取り下されよご蓋をさらんごする所を、女房かけよりちやつご押、詞コレ親父殿、この桶の中にはわしがちつご大事の物を入れておいた、こな様明けてごうするぞ、ホ我は知まい、此桶には最前惟盛卿のお首を入れ置いた。イヤ〳〵此桶にはこなたに見せ

ぬ物があるこ、引寄せれば引戻し、詞おのれがなんにも知らぬ故。イヤこなたが知らぬ故さ。妻は銀ご心得て争ひ果れば、梶原平三、詞扱はこいつら言ひ合せ、縛れくれご下知の下、縛つた〳〵取巻所に、惟物夫婦餓鬼め迄、いごみの權太が生捕つたり、討ち取つたりご呼ばる聲、はつごばかりに彌左衛門、女房娘も氣は狂亂、いごみの權太はいかめしく、若君内侍を猿縛り、宙に引立て目通りに、ごつかご引すへ、詞親父の賣僧が三位惟盛を、熊野浦より連歸り、道にご天窓をそりこぼち、青二才にして彌助ご名をかへ、此間ほてくるしき簪せんさく、生捕つて面恥し存じたに、思ひの外手強い奴村の者の手をかかつて、漸ご討取り、

首に致して持參御實檢ご差出す、詞オ、成程刺殺ち彌助ご云ふは存じながら、先達て云はぬは彌左衛門に、思ひ違ひをなさそう爲、聞き及んだいがみの權、悪者ご聞いたがお上に對しては忠義の者、出かした〳〵内侍六代生捕たな、ハテよい器量、夢野の塵で思はずも、女鹿手鹿の手に入るは天晴れ働き、詞褒美には親の彌左衛門めが命、赦してくれう。イヤ〳〵申し、親の命ごらぬを赦して貰うご思うて、此働きはいたしませぬ。スリヤ親に命は取られても褒美ごほしいか、ハテあのわろの命はあのわろご相對、私には兎角お銀ご願へば梶原、詞ハテ小氣味のよい奴、褒美くれんご着せし羽織、脱いで渡せば佛頂面、詞コリヤ〳〵其羽織は

添くも頼朝公のお召かへ、何時でも鎌倉へ持ち來らば、金銀ご釣替囃託の合紋ご、聞くより頂き出來た々々、詞當世かたりも流行るによつて二重取りをさせぬ分別、ようした物ご引替へ、纏付き渡せば請取つて首を器に納めさせ、詞コリヤ權太、彌左衛門一家の奴等暫く汝に預くる。お氣遣ひなされますな、貧乏ゆるぎもさせませぬテ。扱けなげな男めご擧ごやし梶原平三、纏付引立てたち歸へる、詞ア、これ〳〵其ついでに褒美の銀忘れまいぞご、見送る隙間油斷見合せ彌左衛門、にくさも情しミ引だかへ、ごつご突込恨みの及、うんごのつけに反返る、見るに親子はハツはつご、情いながらも悲しさの、母は思はず馳寄つて、天命知れ

や不幸の罪、思ひ知れやと云ひながら、先だつものは涙にて、伏洗みでぞ泣居たる。彌左衛門齒かみをなし詞泣く女房、なにほへる、不便なの可愛なのと云ふてこんな奴を生けて置くは、世界の人の大きな難儀、門端も踏すなと云ひつけて置いたに内へ引入れ大事の、惟盛様を殺し内儀様や若君を、よう鎌倉へ渡したな、腹が立つて、涙もこぼれて胸が裂ける、三千世界に子を殺す、親と云ふのばおればかり、天晴れ手柄な因果者に、よう爲居つたと拔身の柄、砕るばかりに握り詰め、ふぐりかけるも心は涙、いもみにいがみし權太郎、及物押へて、詞コレ親父殿なんぢやい。此方の力で惟盛を助け

る事は、叶はぬ。コリヤ云ふな今日幸ひと別れ道の傍に手負の死人、よい身替りし首討つて戻り、此中に隠し置き、コリヤこれを見居れと、鮎桶取つて打明ければ、ぐわらり出たる三貫目、詞シャツ、コリヤ銀ちや、こりやどうぢやと呆れ果てたるばかりなり。手負は顔を打詠め、詞おいさしや親父様、私が根性が悪さに御相談の相手もなく、前髪の首を惣髪にして渡さうとは、了簡違ひのあぶない所、梶原ほどの侍も彌助と云ふて青二才の男に仕立てある事を知らいで討手に来ませうか、夫と云はぬはあつちも工み、惟盛様御夫婦の、路銀にせん盗んだ銀、重いを證據に取かへた鮎桶、明けて見たれば中には首、はつと思へば是も幸ひ、月代刺つて突付たは矢張り

お前の仕込みの首、ムウ其又根性で御臺若君に繩をかけ、何故鎌倉へ渡したぞ、ホ、其お二人も見えたのは此權太の女房替、ヤアシテ、惟盛様御夫婦、若君は何國に、オ、違はせませうと袖より出す、一文笛吹立つれば、折よしと惟盛卿、内侍は茶汲の姿となり、若君連れてかけつけ給ひ、詞彌左衛門夫婦の衆、權太郎へ一禮を、ヤア、手負つたかこ驚くも、お變りないかこ悔りも、一度に興をせましましける。母は悲しさ手負に取付き、かほご正しき性根にて人に疎まれ譏らるゝ、身持はなせにしてくれた。常か常なら連合も、むざと手疵も負はせまい、酷い事をこせき上て、悔み數げば權太郎、詞ヤレ其悔み無用、常か常なら梶原

が、身代り食ふては歸りませぬ、まだそれさへも疑ふて、親の命を褒美にくれう、忝いと云ふとばや、詮議に詮議をかける所存、いがみ見たゆゑ油斷して、一べい食ふて歸りしは、禍も三年と、悪い性根の年の明け年、生れ付いて賭勝負に魂を奪はれ、今日もあなたを二十兩、かたり取つたる荷物の中に、恭々しき高位の繪姿、彌助が面に生うつし、合點がいかぬと母人へ、銀の無心をさりに入込み、忍んで聞けば惟盛卿、御身に迫る難儀の段々、此度性根改めずば、いつ親人の御機嫌に、預る時節もあるまいと、打つてかへたる悪事の裏、惟盛様の首はあつても、内侍若君のかかりに立つる人もなく、途方にくれし折からに、詞女房小せ

んが悴を連れ。親御の勸當、古主へ忠義、なにうらたへる事がある、わしと善太をこれかうと、手を廻すれば悴めも、か、様と一所に、俱に廻して縛り繩、かけても、手がはづれ、結んだ繩もしやら解け、いかにんだおれが直な子を持つたは何の因果ちやと、思ふては泣き、しめては泣き、後手にした其時の、心は鬼でも蛇心でも、こたへ兼ねたる血の涙、可愛や不惑や女房も、わつと一聲其時に、血を吐きましたと語るにぞ、力味かへつて彌左衛門、詞エ、聞えぬぞと權太郎、孫めに繩をかける時血を吐く程の悲しさを、常に持つてはなせくれぬ、廣い世界に嫁一人、孫と云ふのもあいつ一人、詞子供が大勢遊んで居れば、親の顔を目印に

にがみのはしたつた子があるか尋ねて見れば、コレ子供衆、權太が息子はあませぬかと、問へば子供はどの權太、家名は何と尋ねられ、おれが口からまんざらに、いがみの權とは得云はず、悪者の子ちや故に、はれ出されて居るであらうと、思ふ程猶そちか憎き、今直る根性が半年前に直つたら、詞のうばい、親父殿、嫁女や、孫の顔見覚えて置うのに。オ、い、おれもそればかりかむせ返り、わつとばかり伏しづむ心を思ひやられたり。内侍は始終御涙、惟盛卿は身にせまる、いさ、思ひにかきくれ給ひ、詞彌左衛門が歎き去る事なれ共、逢ふて別れ逢はで死るも皆因縁、汝が討つて歸りたる首は主馬の小金吾とて、内侍が供せし譜代

の家來、生きてつくせし忠義は薄く死んで身替る忠勤厚し、これも不思議の因縁ご語り給へば、詞テモ扱てもそんならこれも鎌倉の、追手の奴等も皆しわざ、オ、云ふにや及ぶ、右大将頼朝が、威勢にはびこる無得心、一太刀恨みぬ残念と、怒りに交る御涙、實にお道理と彌左衛門、梶原も預けたる陣羽織を取出し、詞に殘し置きし、すたくに引裂ても御一門の數にはたられと、一裂づの御手向、サア遊ばせと差出す、詞何頼朝が着かへこや、晋の豫讓が例を引き、衣を刺して一門の恨みを晴らさんと思ひ知れと、御はかせに手をかけて、羽織を取つて引上げ給へば裏に模様か歌の下の句、詞内や床し

き、内ぞ床しきと、二つ並べて書たるは、アラ心得ず此歌は小町が詠歌雲の上ばかりし昔にかけられど、見し玉簾の内や床しきとありけるを、其返しさて人も知つたる此歌を、もの／＼う書いたは不思議、殊に梶原は和歌に心を寄せし武士、内や床しきは此羽織、の縫目の内ぞ床しきと、襦袢付際切りほごき、見れば内には袈裟衣、珠敷迄添へて入置いたは、詞コリヤごうぢやコハいかにぞ呆れる人々惟盛卿、詞ホウさもそうすさもあらん、保元平治の其の昔、我父小松の重盛、池の禪尼と云ひ合せ、死罪に極まる頼朝を、命助けて伊東へ流入、其恩報じに惟盛を、助けて出家させよこの、鸚鵡かへしか恩返ししか、ハア、敵ながらも頼朝は

天晴れの大將、見し玉簾の内よりも心の内の床しやと、衣を取てこれとて、父重盛の御蔭と頂き給ふぞ道理なる。人々はつこ悦び涙、手負ひの權太は這ひ寄り攪り寄り、詞及ばぬ智恵で梶原を、たげかつたと思ふたが、あつちが何にも皆合點、思へばこれまでかたつたも、後は命をなたらるゝ種さしらざる淺ましき、悔みに近き終り際、惟盛卿もこれ迄は、佛を語つて輪廻を離れず、離る時は今此時と、鬢ぶつとりと切給へば、内侍若君お里はすかり、俱に尼共姿をかへ、宮仕へをゆるしてご願へご叶はず、打拂ひく、内侍は高雄の文覺へ、六代も事頼まれよ、お里は兄になりかけり、親へ孝行肝要と、立出で給へば彌左衛門、詞女

中の供は年寄りの、役と諸共旅用意手負を勞はる母親が、詞ノウコレつれない親父殿、權太郎も最期も近かし、死目にあふて下されと、止むるにせきあげ彌左衛門、詞現在血を分けた悴を手にかけて、ごう死目にあはれうぞ、死んだを見ては一足も、あるかるゝ物かいの、息ある内は叶はぬ迄も、たすかる事もあらうかと、思ふがせめての力草、留るそなたが胸慈と、云ふて泣き出す爺親に、母は取わけ娘は猶、不惑く、惟盛の首には輪袈裟手に衣、手向の文の阿耨俱陀羅、三藐三菩提の門出、高野高野へ引き別くる、夫婦の別れに親子の名残り、手負は見送る顔と顔、思ひはいづれ大和路や、芳野に残る名物に、惟盛彌助と云ふ鮎屋、今に

さかふる花の里、其名も高くあらはせり。  
道行初音の旅路の段

前段鮎屋の次即ち千本櫻の四段目になつてゐます。内容は都落ちをした義經の後を慕つて靜御前は佐藤忠信を一人伴につれて吉野山御殿へ急ぎます。御殿には既に實の忠信が居て靜のお供は靜の所持する初音の鼓の音に戀おれてついて來た狐であつたのです。義經も不憫に思ひ親狐の皮で張つた初音の鼓を與へ源九郎と命名してやります。この淨瑠璃の床本を記しますと、

M 戀と忠義はいづれも重い、かて思ひはばかりなや忠とまことの武士に君が情とあづけられしづかに忍ぶ都をば後に見捨て、たびだちてつくらぬなりもしつれの御行末はなにはづのなみにゆられて、たよひて今ばよしのと人づてのうはさを道しほりにて大和路さしてしたひゆく。見はたせばよもの櫓もほころびて梅がへうたふうたひめのさこの男が聲々にわがづまがてんじやうぬけてすえるぜん、ひるのまくらははつがもなや、天じようぬけてすへるぜんひるのまくらははつがもなや、チーつがもなや、おかしからすの一ふしに人も、わらやのそだちにも春はばねつくてまり、ひいふうつくづくこきげばこち風音をへて、こぞの水を徳若にごまんざいさ君もさかへましますあいけふありや。たのもしやさぞなやまさの人ならば御かくれがはい



疵持つ足の踏送さへ、低き敷居も越  
 兼る。宗岸は遠慮なく、詞半兵衛殿  
 お宿にかこ、娘を連れて打連れれば、妻  
 は門の戸引立て、サア／＼先づお上  
 り成されませと、奥底も無き詞の中  
 夫さ聞くより半兵衛が、一間を出る  
 溢々顔。詞娘を連れて行かれたからば  
 此方の内に用は無い筈、何の爲にこ  
 ざつた事と、針持つ詞に妻は氣の毒  
 詞イヤもふ人様に追従云はぬ偏屈な  
 我夫、必ずお氣に障られて下さいま  
 すな、此間は嫁女の歸つて居られま  
 して、いかいお世話でござりませふ  
 ナン／＼、半兵衛殿の立腹は皆尤  
 も、三勝さやりに心奪はれ、夜泊り  
 して女房を嫌ふ半七、所詮末の詰ら  
 め事さ、無理に引立行つたのは、娘  
 に引を取らずまい爲儂が氣迷ひ、夫

から思案爲るに付け、唐も倭も一旦  
 嫁に遣つた娘、嫌はれぬが如何爲ふ  
 が、男の方から追出すまで、取戻す  
 る云ふ理屈は無い筈、コリヤ宗岸が  
 一生の仕損ひ、ご悔んでも跡の祭り  
 園めも晝夜泣き悲しみ、朝夕も勸ま  
 れば、若や病が起らふかこ、見て居  
 る親の心は闇、儂も天満に年古ふ住  
 んであれば、人に理屈も云ふ者なれ  
 ば、誤りば佞れば成らぬさ、年寄の  
 顔押拭ふて來ました。何彼のこは  
 了簡して、今までの通り嫁じやと思  
 ふて下され、これ頼みます御夫婦ご  
 謝り入つたる挨拶に、お園とうぢう  
 ぢ、手を支へ。爺様の一徹で、無理  
 に連れられ歸りしが、一旦殿御さ極ま  
 つた半七様に嫌はれるは皆私か不調  
 法、鈍に生れた此身の科、詞今から

法は、此天窓に免じ了簡して、何卒  
 嫁に。否でござる、忤めも勘當した  
 れば、嫁さ云ふべき者もない筈。サ  
 ア夫も懲しめの爲當座の勘當、イヤ  
 當座でない、七生までの勘當ぢや。  
 ム、其又七生まで勘當した半七が代  
 りに、此方は何で繩に掛つた。ヤア  
 サア半七とは親でも子でも無い此方  
 が、今日代官所で何の爲に。縛られ  
 て戻らしやつたさ、思ひも寄らぬ宗  
 岸が、詞に悔り驚く、女房、嫁も俱  
 々立寄つて、肌押脱せば半兵衛が、  
 小手を緩めし羽搔締。ノウ情無や何  
 事と、嫁はうる／＼、女房も取付き  
 歎けば宗岸が。詞イヤ未だ驚くこと  
 がある、望の半七は人殺し、お尋れ  
 者になつたわいのと、聞くより二人  
 は又悔り。夫は何故如何した譯、様

子を聞かしてコレ／＼半兵衛殿と聞  
 へども更に返答は差俯いて詞なし。  
 宗岸涙の目をしばたき。詞一昨日  
 の晩山の口で、善右衛門を殺したは  
 萬屋の半七と、噂を聞いた時は、驚  
 くまいか悔りせまいか、膝も腰も抜  
 果じが、思へば不孝者、能い時勘當  
 さしやつて、親に難儀の掛らぬは、  
 未だ此上の仕合せ思ふたは他人の了  
 簡、違ふた此方の縛り繩、科極まつ  
 た半七が命、一日なりと延したいこ  
 人殺しの科を身に引き受、繩掛つた  
 此方の心は、眞實心に子を思ふ親の  
 誠さ知れば知る程、宗岸が仕損ひ、  
 半七の身の難儀、此方も勘當して仕  
 舞ひ、儂も娘を取戻したら、親にか  
 ける首纏も無い、能い事爲たご世間  
 から譽める人も有らうが、親ご成り  
 随分お氣に入る様に致しませう程に  
 猶且元の嫁娘さ、仰しやつて下さり  
 ませ、お二人様も、跡は詞も涙なり  
 詞オ、何のマア、其方さへ其心なら  
 此方は變らぬ嫁姑、ノウ親仁殿、そ  
 うぢや無いか。イヤそうぢやない。  
 昔唐に例が有る。太公望さやらいふ  
 人の妻、夫に隙取り月日を經て、訛  
 言に來りし時、鉢の水を大地に覆さ  
 せ、其水を鉢へ入よ、元の如く夫婦  
 に成らんさ、太公望も云はれたさ、  
 且外講釋で聞いて來た、夫さ丁度同  
 じ事、此方の方から無理隙取つて、  
 今更嫁さ思へとは、何時まで云つて  
 も返らぬ事、口詞叩かず、早う連  
 て退しやれ／＼と、膠もしや／＼り  
 も納戸口、顔を背けてゐたりける。  
 詞オ其腹立は尤も／＼、お重々不調  
 男ご成るが、大抵深い線かいのう。  
 斯う云ふ時宜に成つた時は、譽めら  
 る／＼よりは笑はる、が親の慈悲、片  
 時も早う連れてきた心は、一旦  
 嫁に遣したれば、半七が厭がるなら  
 ハテ尼にしてなご此内で、御夫婦の  
 亡き後の、香花なりにも取らして下  
 され、コレ手を合して頼みます、訛  
 言が叶はれば、引放されたご突き詰  
 て、短慮な心も出し居るかこ、案じ  
 過ぎて夜の目も合す、母親は無し唯  
 一人、彼女を思ふ儂が因果、此方の  
 繩目も半七が、科人に成つたら猶可  
 愛かる、譬へ又勘當が定ても又離切  
 つたご誠でも、眞實親子の肉縁は、  
 切るに切られぬ血筋の親、儂も此方  
 程は無ければご娘は可愛い、まして  
 勘當はせぬ娘、愚痴なご人が笑はふ

が儘や可愛い不便でござる。これこれ聞入れて給へ半兵衛殿と、是まで泣かぬ宗岸が、堪へにこたへし溜々を、たくし掛たる叫び泣き。我強う生れし半兵衛も、男の心根思ひ遣りオ、道理じや〜宗岸殿。こ、跡はないぢやくり、妻もお園も一緒に、四人が涙洪水に、樋の口開けし如くなり。半兵衛涙の内よりもお園も顔を打守り。何から何まで氣を付けて孝行にして給る。斯な嫁も尋れたことで、最一人と有る物じや無い、世間の人の嫁鑑、半七も事は思はぬが、其方に別る、半兵衛は、能々不仕合せ、退せむ無い、返しむ無い、こは思へども、此方に置けば此儘若後家、儂は夫も可愛い。いさうおぢやる。夫で訛言聞入ぬ、了簡して

呼戻さぬ。これ嫁女、必ず酷い恨んでばし給んなや。一人の悍はお尋ね者。翌日より誰を力にせうぞ。孝行にして給はつたか、今では結句恨めしいと、せき上げせき入る舅の脊擦るお園も正體なく、伏沈むこそ道理なり。半兵衛漸々顔を上げ、云はればならぬ事も有れど、孝行な嫁女の手前、胸に穿つて言ひ悪い、宗岸殿奥の間で言ひ明さん。これお園、其方を更々嫌ふぢやない、氣に掛けて給るなや、舅殿へ話す中、暫く爰に三人は悄々奥へ泣に行く心の中心ぞ哀れる。跡には園が憂思ひ、かくれてしも鳥羽玉の、世の味氣無さ身一つに、結ばれ解ぬ片絲の、繰返したる獨言、詞今頃は半七様何處に如何してござらうぞ、今更返ら

ぬ事ながら、私ご言ふ者無いならば半兵衛さんもお通に免じ、子まで成したる三勝殿を、疾にも呼入れさしやんしたら、半七様の身持も直り、御勤當も有るまいに、思へば〜此園が、去年の秋の煩ひに、寧ろ死んで終ふたら、斯うした難儀は出来まいもの、お氣に入らぬぞ知りながら未練な私、輪廻故、添臥は適はずも、お側に居度いご辛抱して是まで居たのお身の仇。今の思ひに比ぶれば、一年前に此園が、死る心付かなんだ。堪へて給へ半七様、私や此様に思ふてあると、恨みつらみは露程も、夫を思ふ眞實心、猶彌や増る憂思ひ。詞翌日はさうから父様に又連れられて天満へ往に、半七様の不圖した果敢ない便りを聞くならば、

思ひ死に死ぬて有る、逆も浮世は立の覺悟嫌はれても夫の内、此家で死れば後の世の若しや契りの綱にもご果期を急ぐ心根は、餘所の見る目もいぢらし。斯る哀れも知らぬ子の、合泣く聲に目や覺ましけん、一間を出て、乳飲まう、乳が飲み度いおは〜と、お園が膝に寄添ふ子の、顔見て悔り抱き寄せ、詞ヤア其方は美濃屋のお通じや無いか、爰へは如何して在つたか、不審ながらも抱上ぐれば、半兵衛宗岸母親も一間の内を轉び出、詞オ、これ〜嫁女忝ない其心、障子の内で聞く度に、拜んでばかりゐたばい。禮云う事も澤山あれど心の急ぐは此子の事、美濃屋のお通云はしやつたは、半七ご三勝の。アイお二人の中間に出来たお通云ふは此子じやわいな。ヤア〜親父殿聞かしやつたかオ、聞いて居る、其とお通を、ナ、い、何で捨子にして

ト此地へ越した是や理由が有らう、娘、何所ぞに、書いた物でも無いが、早う尋れて見やと言ふ内に、わくせきあくる守袋、内よりはらりと落ちたる一通取る間遅し封押し切、詞ヤア何ぢや、書置の事と書いて有る。ヤア〜これこれ嫁女其方の好い目でちやつと讀や〜。アイ〜、ナニナニ度契りて親子と成る、父の思は山よりも高きこの世の教、我身にも辨へ居候へども、其御恩も得送らず、儘ならぬ義理に掬まれて、心にも有らぬ不孝の罪お救し下され度候、別て母様の御養育。申しお前の事でござります、能ふお聞き成されませいオ、能ふ聞いてゐますわいの。唄、聞いてあるさの障子より、洩れ出る月は冴れど胸の闇、合詞エ、時と隣りの稽古、然して其跡は、何ぞ書いて有るぞ。アイ母様の御養育海よりも深き御恵み、親父様御機嫌

お子連れなら  
樂天地へ

五月信子  
高橋信義の  
近代座連鎖劇

モドモ館の館映  
ドモ館の館映  
毎正午開館

悪い時には、蔭になり陽になり、幾千萬の  
 お心遣ひも、泡も消行く我難儀、人を殺せ  
 し身も成り候へば、思ひ設けぬ御別れ。詞  
 ア、夫なら矢張半七様は、オイノワ嫁女、  
 善右衛門を殺しましたわいのふ。ハア彼善  
 右衛門と云ふ奴も、大抵や大槓、悪い奴ぢ  
 や無いわいの、彼んな悪者でも喧嘩兩成敗  
 我子の命を解死人に取らる、と思へば思へ  
 宗岸殿、口惜いわいの、無念にごさる  
 の岸殿、口惜いわいの、無念にごさる  
 ご述懐涙見聞くお園は以前の刺刀、南無阿  
 彌陀佛と覺悟の體、是はと驚く、母、宗岸  
 叶はぬ手にも半兵衛は、漸々押へて、これ  
 嫁女、詞寄ばかりを跡に置き、死なうと  
 は胸怒ぢやはい。エ、これが死なうと  
 ゐられませうか、放して殺して下さんせ。  
 オ、娘、尤もぢや、わいの、ア老少不  
 定の世の中、聞流したも今身の上、みづ  
 々とした若い者、義理に迫つて死ぬると  
 ば。ノウ半兵衛殿宗岸殿。思ひ廻せば廻す  
 程、チエ、口惜いわいの。唄 鷺鷥  
 の片羽のさぼく、こに迷ひ行く小夜千  
 鳥、無残や半七は、今宵限りの命ぞ、三  
 勝伴ひしほく、こ心に掛る我子の顔、名残  
 にせめて今一目も、俱に戸口に夜の鶴、内  
 には夫と白髪の母、心なられど書置を又取  
 上て讀む文章。詞人を殺し一日も、生長ら  
 へる所存はなく候へども、お通さ申す娘一  
 人ござ候て、殊にかよはき性質、不便さ餘  
 る親心、夫に心も引かされて、今日まで長  
 へ候へども所詮助からぬ身に候へば思召も  
 奢みずお通を遣はし候ま、私の小さく成  
 しと思召され詞ぞれ、婆見しやいの、  
 エ、私の小さく成しと思召され御養育のお  
 世話の程くれ、頼み上候。子を持つて知  
 る親の恩も、お通が不便さいぢらしさに、  
 お二人様の御恩の程、猶更此身に浸み應へ

有難存奉候。又々心掛は、親父殿の御  
 勘當相果候後にも、お赦し下され候様、  
 母様宜敷お執成、是のみ黄泉の障に御座候  
 々々々。オ、道理ぢや道理ぢや、可  
 愛やと泣聲洩る、表には、半七も身に應へ  
 斯る嘆きも我故、思は、今更空恐ろしく  
 身を悔んだる男泣、袖や袂を嚙締々々、泣  
 く音止むる憂き思ひ此方はお園も猶涙、泣  
 々取上ぐる書置の、讀むも果敢なき世の中  
 に、詞、女は其家に在つて定まる夫一人を、  
 頼みに思ふ者に候處、其頼みに思ふ我等が  
 みもち、いつしか愛想らしき辭も掛す、終  
 に一度の添臥も無候へども、其色目も致さ  
 ずして、親達大事夫大事と、辛抱に辛抱成  
 され候段山々嬉しく存じまゐらせ候。今ま  
 へども、三勝とはそもじの見えぬ先からの  
 馴染にて、子まで設けし中に候へば互に退  
 去も成り難く、夫故疎遠に打過まゐらせ候。  
 併し夫婦は二世と申す事もそふらへば、未  
 來は必ず夫婦にて候々、詞、オ、是やまあ誠  
 か半七様。こりや、い娘、未來で夫婦と書  
 いて有るか、い、アイ、未來は未來  
 ぢや、一日なりと此世で女夫にして遣り  
 度い。何としてマア此半七は、善右衛  
 門を殺しましたぞ。どれ、娘最少とじや  
 どれおれが讀ませう。兎角不孝の我等に  
 候へども、死後には嗚やお二人や、宗岸様  
 の御歎き、随分々々力を付け此身に代りて  
 御孝行に成し下されべく候。申し殘し度き

### BENTENZA の 映 畫

歐米映畫の、  
 名篇を最も、  
 見易く提供、  
 する映畫戲堂

座 天 辨 館妹姉の座竹松で堀頓道

表代の畫映本日  
 マネキ竹松  
 切封の畫映秀優

座 日 朝 りぼんととど

事ごもは数々候へども、涙に字性も見え難く、あらあら惜しき筆止申候只々お通が事のみ頼上候。此上は亡人後のお念佛、南無阿彌陀佛々々々々々々々々、讀も終らす宗岸親子、又俯沈めば半兵衛夫婦、お通を中に抱き上げ、初孫の顔が見度い心に思へど世間の義理で是まで逢も見もせなんだ、斯う言ふ事ぞ知つたらば、顔見ぬ内が増してあつた。愛らし盛りのお通、半七も一所に暮すなら能い樂みで有らふ物、これ婆見やいの、あれ何にも知らず手打やあばいばかり。オイノ是や孫よ、モウ父も母も無い程に、此婆一所に寝いよ。こはいふ者の乳も無く、今から先の寝起にも、嗚や歎かん親々が、知らずにあるが朋懸者、惨い

心いちらしやこ、言ふ聲洩る、三勝が、思はず乳房を握り締め、詞、乳は爰に有る物を飲まして遣たい顔見度い、乳が張るわいのうこ、身を慄かせ、駈入らんにも關の戸に空音も成らず羽拔鳥、親は外面に血の涙、子はやすかたの安からぬ、悲しき迫る内、外、一度にわつこ湧き出る、涙浪花江泉川小きんを汲出す如くなり半七は齒を噛締め斯ばかり深き御情、是非もなや勿體なや、不孝を赦させ給はれこ、悔み歎けば三勝も皆成故の御事、俱に詫入る中に半七、詞何時まで泣いても返らぬ縁言親父様の御繩目、早う解くは身の最期、イザ／＼急むんサアおぢやこ立上りし、今生の別れにせめてお顔をこ差し覗けば三勝も、お通を一

目こ延上り、見れども親子隔ての關何ぞ千萬無量の想ひ、兩手を合せ伏拜み、合おきらば合々云ふ聲も歎きに埋む我家の中見返り／＼死に行く、身のなる果ぞ哀なり。半兵衛はつこ心付き。詞此書置の文體では、今宵最期と決めし半七、宗岸殿も手分して行衛を尋れん、サア早ふ／＼／＼こ身づくろひ、立出んこする所に、思ひ掛なき表より、詞ヤア／＼方々、善右衛門を殺せし咎人西屋半七召捕つたりと、呼はつて庄九郎に繩を掛、立出る宮城十内、詞半七が殺せし今市の善右衛門は、國元にて用金を盗みし盜賊、召捕に來りし處、一昨夜半七に殺されし由、則ち善右衛門の同類たる庄九郎を召捕り、彼が白狀にて半七親子に


科無しと、立寄つて半兵衛が繩目解けば四人が悦び、夢では無いか伏拜み、詞これ／＼親父殿、十内様のお情で半七も命助かるこ、のう、何ぞ命の有る中に、止めて下され半兵衛殿、急るを聞いて十内が詞半七は死に出たこや、エ、遅かりし残念々々、役目なれば心に任せず、夜明ぬ中に早お行きやれと、十内が花も實もある櫻の、淀和々國の名も、大和五條の茜染今色上し艶姿其三勝が言の葉を、爰に移して止められ。

四月興行  
徳田純宏作  
安政怪盜傳  
五幕  
十四場  
正午と五時半  
二回開演

春の角座は  
新聲劇一派

御覽料  
一等 金二・〇〇  
二等 金一・〇〇  
三等 松手金〇・五〇

全日本を縦断する  
松竹座チエーンの本城



座王の一ユウレと書映  
りぼんとうど  
座 竹 松

君見すや  
巴里・紐育のレヴェ  
ーを凌駕する豪華の  
春のおどり  
松竹楽劇部總出演  
歐米映畫の粹は盡く  
封切さる





戻り橋の段

野澤勝平	豊澤仙糸	竹本播磨	竹本陸路	竹本長子	豊竹浪花	豊竹辰駒	渡邊文字	若菜駒太夫
------	------	------	------	------	------	------	------	-------

切増補大江山

戻り橋の段

この渡邊の綱も羅生門で鬼女の片腕を切落したさいふ有名な傳説は謡曲に「羅生門」歌舞伎には「茨木」戻り橋」こなつて傳へられてゐますがその原據は一説によるに「日本紀略」天徳二年條に閏七月九日一人の狂女が浴中に現れて死人の頭を取つて食ひその後往々諸門に臥す病人も生き乍ら狂女の爲めに肉を食はれたさいふ事實に渡邊綱の武勇を附會して人食鬼女を作り上げたのださいふことです。その内容を申し上げますと愛宕山の鬼女が夜な／＼浴中に現れて人を食ひ、夜は往來の人も絶える。浴中警衛の任に當る源頼光の四天王の一人渡邊綱が君の使で堀川戻橋にかゝるこ扇折小百合

5 4 3 2 1  
尺取虫 一場  
かげぐち 一場  
初恋 一場  
黄金の雨 一場  
春宵 二場

喜劇の座  
會我家彩  
新狂言種五  
彩擷えた

料 3.20  
觀劇 3.00  
特等 1.50  
一等 1.00  
二等 0.50

中座  
道頓堀

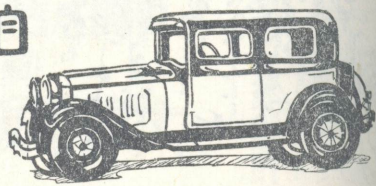
人形

左源太	右源太	扇打娘(實は悪鬼)	渡邊源吾綱
吉田光之助	吉田文作	桐竹紋十郎	吉田玉松

野澤勝之	豊澤新清	鶴澤福團	鶴澤友二	鶴澤清太	鶴澤寛太	豊澤友衛	豊澤廣太
------	------	------	------	------	------	------	------

こ名のる世にも稀な美女が現れ、暮れて夜道の女一人、五條まで綱と道連になつて呉れこの願ひ、綱は油断なく彼女と連れ立つて戻橋を渡る時ふさ水鏡に映る物凄鬼女の形相、何氣なく女に舞を所望して、その化の皮をはぎ大立廻りの末髭切丸の威徳で鬼女の片腕を切り落す。床本を寫しますとM夫普天の下卒士の濱、王土に有らぬ所なきに何國に妖魔の住けるか睦月の頃より浴中へ悪鬼現はれ人を取、夜は往來の人もなし綱春雨もいつしか暗てしる／＼こ月照渡る堀川のはや瀬の流落ちて水音すこき戻りばし、扱も渡邊の源吾綱は右源太左源太御供にて戻り橋へこあゆみしおイカニ兩人唯伴々の姫君へ密々の仰せ承り御使に参りしお路次のさばりこ御秘藏の影切の太刀賜りしは武門の譽身の面目片時も早く立歸り彼の方よりの御返事を我君へ申上入。右

...は車動自  
トルベズル  
...を用乗御



源太はつこ承り昨日迄も降り續きしが此頃になきよき月夜、其尾について左源太が闇にあられば妖怪も今宵は出づる事あるまじお心安く候はん、ム、あの月の模様では早三更と覺ゆるぞ兩人道を急ぐべし、夜更ぬ内に主従が打連て行んぞ、折ふしつと吹風す風が有ぬか岸の柳の騒むしく心ならればふりかへり、ハテ心得ぬ今吹風す夜風の身にしみみ五体の熱氣扱は妖魔の仕はさにて我をおごさん巧みよないかなる妖魔の術有共夫を恐るゝ綱にあらすイテ妖怪を退治して君へ土産に參らせんイザこひ來れさ太刀引そばめ木の下蔭へ忍び入若又むら立し兩雲の陰洩る月を夜すがにてたざる大路に人影も火蔭も見えず我影をもしや人がか驚きて被衣に身をば忍ぶ擗けふの細布ならずして女心に胸合すおひなやみて來りけるア、今宵の空の定めなく降

らぬ内にご思へども爰は一條尻り橋見れば行かふ人もなしア、便もなやさたすみて暫し休らひ居たりける。綱は小蔭を立出てアイヤ女性は何れへ參られるぞ若チ、是は、お武家様わらはは、一條の大宮より五條のわたりへ今宵の中是非參らればならぬ者が女の身で只一人此物騒な夜の道怖い、こ歩む内今のあなたのお聲にてほんに胸り致しました。綱、ホ、怖いぞ申は尤も也五條の巨りへ參るご有ばア、幸の能き道連れ五條の邊りへ用事も有らば某送つて遣はそふ。若コハお情け深い其仰お詞にしたがひますればどうぞお連れなされて下さりませ。綱いざ參らふぞ打連立折しも空の雲暗れて若月にあり、小川の流水に寫りし異形の姿、綱は目早く今水中に寫りし蔭は若エ、綱ア、イヤ夜更ぬ内に早く、西へ廻りし若月の輪に、綱遠く若放れて愛宕山



目丁五橋今  
店家37  
六二五三  
二五三二 局本話電

綱北野は近く若清淵の綱森はこなたも若ふ綱若か綱へり若見上る顔に綱ばら若ばら綱木々の翠も雲運ぶ若又も雨か立休らひ綱は女をいたはりて歩行馴れぬ夜道にて囁草臥れし事ならん若イエ、わらはよればあなたこそ足弱をお連れなされまして定めしお草臥でござりましょう、綱ナニサ、最前より見受し所ハテあてやかなおこと姿立つ道に馴れやすく今は隔も中空の朧も春の名残こや都人さば云ひなむらいさも優しき形風俗いな事を尋ねれ共御身が父は何人なるぞ若ハイお尋ねに預りお答へ申すおもはゆく父は五條の扇おり常々舞を好みし故はらはも幼き頃よりしておしへを受しが身の徳にて此程も或る御所にお宮仕へを致しました綱、ホ、いさも有らん、恥しなから某は未だ舞を見たる事なしさし舞を見せられまいか若お送り下さる其御禮に

只今御覽に入まじよふが何を申も途中の事拙き事とお叱りはモ只幾重にも一禮し女性ば扇借受て會釋をこぼし進み出空も霞で八重一重櫻待する諸人が群つて爰へ清水や初瀬の山に雪ぞ見し花の散ゆく嵐山惜む別れの春過ぎて夏の初めに後れにし花も青葉に衣むへ木々の翠の美しや綱テサテ面白き事なりしぞかいる伎藝の有者を妻に持なば能樂しみ春の夜道に結ぶ縁にし解くか解かぬはお事か心只一ツコレサどうかく、ご寄添へば若女はつこ袖覆ひおたはむれさば知りながら嘘にも嬉しい其仰せ定めてあなたは奥様をお持なされてで御座りまじよふ綱ア、イヤ、未だ妻はめさらぬが見らるる通りの不骨もの誰も妻には成人がない若なんのまわらない事ござりまじよふ。まご、こしたそのお詞お情深きお心に今宵まみへし妾さへ縁しを結ぶ露もかな思ふ戀路

新開店  
りな用扱  
大坂電報通信用



の初はたる云ひ出しかれて胸こがし若葉の  
闇に迷も節女郎は取分て姿優しき花菖蒲  
引つ引れつ澤水に袖も濡にし事やらん綱こ  
なたばなをも打さけて夫は御身の思ひ違ひ  
かゝる名もなき田舎武士思ひをかける者か  
あらふか若イエ／＼知つて居り舛立派なお  
名前綱ム何立派な名前さば若當時門理を  
守りの役頼光朝臣の御門にて渡邊源吾綱こ  
の綱ムいかじ致して我名をば若サア戀  
しと思ふ殿御故こより存じて居りまする  
戀しく思ふさ云ふは偽り御身も我名を存  
んぜしは妖魔の術で有ふがや若ムチホー  
、又恠りさそふと思ふてアノマア眞顔でコ  
レ申御覽の通私ば若菜綱エヘい、いし  
らん、敷もぬかしたりな汝は心付かざりし  
が最前是へ来る道すじ月の光に有り／＼こ  
水に映りし鬼形の姿若なんこ綱媚よき女に  
化する共其本性は悪鬼ならん若ム、綱サア

斯見ぬきし上からは其本性を現はすか若サ  
ア綱君より賜ける此御太刀髭切丸の利劔の  
切味すみやかに降伏さそふか若サア綱サア  
若サア綱サア若サア綱サア／＼／＼／＼  
源の頼光が家臣渡邊の源吾綱が向ふたり  
變化の性體現はせよこ柄に手をかけ詰かけ  
たり若こなたの妖女は愈に憤怒の相を現し  
て次第／＼に變化する姿眼いからし大音上  
我ば愛宕の山奥に幾年住し悪鬼也斯見現は  
されし上からは我隠れ家へ連れ行て引裂吳  
れんいざこいさ云ふより早く飛かゝり綱が  
袴がみむんすこ掴み引立行ん其有様綱ナニ  
こしやくなりさふり放す若又も掴みし強寛  
の力綱こなたは動かぬ金剛力若引つ綱引る  
若時しも有一天俄かにかきくもり震動な  
して四方より黒雲霞ひ重りて砂石さ飛す暴  
風に連て虚空へ引上げればあやしかりける次  
第なり。

新劇演線明日に光榮の目指第一劇場

第一 淀君  
三上於菟吉作  
森田中郎監演  
佛蘭西男爵原作  
山口存男監演  
青山修作舞臺監督  
松山志津馬舞臺監督

第二 色氣ばかり  
和日精舞臺照明及効果

第三 疵高倉  
舞臺劇曲原  
青江舜二郎作  
舞臺劇曲原

第四 人氣投票  
舞臺劇曲原  
村田芳生監演

觀劇料  
特等 金三・二〇  
一等 金二・三〇  
二等 金一・五〇  
三等 金一・〇〇  
四等 金〇・六〇  
全小人 金〇・三〇

座花浪  
・毎月四時開幕・  
・どうとんぼり・

### 四ツ橋畔より

#### — 消息日記 —

△三月六日 絶讃の裡に三月興行の  
初日開く。斯道の名匠竹本越路太  
夫と名庭総阿彌の七回忌追善興行  
と越路の遺子常子太夫も四世さの  
太夫の襲名披露をした。

△十一日  
大阪府耕地整理協會の大總見が  
りました。

△八日  
第四師團長林彌三吉閣下、旅團長  
井上忠也閣下の將軍も來觀、軍  
人の觀た郷土藝術論として味ふべ  
きお言葉を下すつた。

#### △十八日

越路太夫の命日のため生玉中寺町  
清恩寺に於て遺族門弟等に白井社  
長、文樂座巨頭連が祭主となつて  
嚴そかに法要を營んだ。歌舞伎側  
からは實川延若氏の顔も見えてゐ  
た。

#### △十九日

総阿彌翁の命日。高津中寺町久本  
寺に於て白井社長福井常務等の顔  
も見えて法要を營んだ。

#### △十五日

大阪市主催で全國六大都市青年致  
育會の幹部慰勞會が開催された。

#### △十七日

陸軍大將福田閣下の御一行がお氣

#### △廿二日

日本にラヂオが出来て五周年に相  
當するさいふので日本放送協會で  
文樂を一日買切り出資者並に主な  
る名士を請待した。この日全國へ  
舞臺中繼で『妹脊山』の山の段が  
津太夫、土佐、古観、鏡、友次郎  
吉兵衛、新左衛門、清六等で放送  
された、前月の勸進帳にも増した

好成績であつた。

△廿八日

京阪の春を愛でに西下した床次閣下夫妻は奈良ホテルから來阪、白井本社長の案内でその忙中を制つて來觀された。白井社長の説明で紋十郎が鮮かな手遣ひで靜御前を見せたが非常な満悦であつた。別館喫茶室で白井社長と記念撮影をした。

△三十日

東京より松居松翁氏も來觀され場内の設備舞臺の妙技を賞讃して往つた。

△四月一日

名人初代豊澤團平の三十三回忌命

日併せて妻女チカ女の三十七回忌阿倍野の墓地で文樂座巨頭連も施主となり故人の至藝を追慕する墓参をした。

△四月三日

第八回日本醫學會懇親大會に先立つて加藤博士の招待で貳百名の耳鼻咽喉科の國手連が古典藝術の妙技を總見せられた。

△四月五日

第八回日本醫學會懇親大會も全シートを占めて開催された。當座からは美麗な原色版數度刷のプロマイド三枚一組を全會員に記念として進呈した。

△四月六日

◆文樂座御ひみき名簿募集◆

一、お申込は必ず官製はがきの事。

一、葉書には両面ともに御住所御芳名を御明記下さい。

(御住所御芳名の他一切不要)

一、御ひみき名簿作製の上御芳名に随つて種々の計劃の御通報を申上げ、且つ御優待方法を講じます。

一、會費其他一切申受けません。

一、宛名は大阪市南區四ツ橋 文樂座編輯部宛の事。

文樂座の歴史が全部わかる唯一の文獻

「文樂今昔譚」 特價金貳圓にて發賣

幕間の御休憩に是非一冊

月刊「道頓堀」 一部 金三十錢

美しいグラフィック興味ある好讀物

昭和五年四月五日印刷  
昭和五年四月六日發行

大阪・四ツ橋・文樂座  
編輯部 大塚 良三

大阪市西區土佐堀通一丁目  
印刷所 永井太三郎

大阪市西區土佐堀通一丁目  
印刷所 永井日英堂

刷印るゆらあ

所刷印堂英日井永

目丁一通堀佐土區西市阪大

番三八〇三長 }  
番〇四九四 } (44) 堀佐土話電  
番一四九四 }

# 人形浄瑠璃

五月興行  
文楽座



文楽座 橋ツ四

金五十銭

若く明るい顔になる

# レト白粉

